
銀魂 一春雨第七師団戦記一

幻獣王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 一春雨第七師団戦記一

【Nコード】

N3418Y

【作者名】

幻獣王

【あらすじ】

砂漠の星で放浪中、戦いに飢えた夜兎族の青年は2人の宇宙海賊に遭遇する。この時、夜兎族の青年は人生の歯車を加速させる。

※神威と阿伏兔（春雨側）が中心ですので、万事屋（地球側）メンバーが登場するか分かりませんのでご注意ください。

似た者同士は突然出会う（前書き）

初の銀魂小説ですので、何卒よろしくお願いします m
〔
m

似た者同士は突然出会う

何処かの惑星。

自然林が無い砂漠のと真ん中で佇む者が1人。南の空に高く昇る太陽と、太陽の日射が砂漠を灼熱化させる。

何故か周囲には、死体の山が転がっている。死体は人間では無い。

あまんと
天人……そう地球と言う星では呼ばれている。

死体から流れる血が濁流のように、荒野を赤色へ半々に染めるが、血は砂に紛れて灼熱の太陽によって蒸発。

死体がゴロゴロ転がる中心に1人の青年が佇んでいた。

両目と髪の毛以外見えないように顔や両腕にも素肌を見せずに包帯を巻いている。服装は黒を基調とした中華服で身体全体を太陽の日射から守るように、柿色で塗られた傘を差し、意匠は江戸時代に使われた傘を類似させる。

「強いねえ」

感心が籠った声。

死体の山を無表情と平然とした態度で歩いて来る。

「これゼンブ君がやったの？」

声の主も青年と似たような姿だ。

「……」

質問に青年は答えない。

目だけはその声の主に合わせてる。

沈黙する青年に構わず彼は喋る。

「俺と少しだけ、殺ろうよ♪」

笑顔で「殺ろう」と青年に勝負を申込む。その無表情の裏にトンでもない何かを感じ取る青年は彼と向き合った瞬間、両者は同時に傘を放り投げていきなり殴打。

青年は素早く片方の空いた手で彼の殴打した手首を掴み、数10メートル先へ軽々と空へ投げる。

投げられた彼は空中で宙返り、砂地へ着地すると青年に向かって加速しながら走る。

青年も彼の行動に合わせて走る。

砂地を蹴って空中へ上がり、両者は身体全体を遠心力の応用で回し蹴り。脚と脚がぶつかり、青年は両脚で彼の脚を挟み、ネジを回すように彼を砂地へ叩き落とす。

後方へ数メートル跳んで下がり、彼が立ち上がるがどうか砂煙の先を見る。

あれくらいの衝撃で終わる筈は無いと踏まえ、暫く様子を伺う。

砂煙が舞い、その中から1つの影が現れる。

「ナカナカやるゝ。でもこれからだよ？」

砂漠がクッション代わりと成って叩き落とす衝撃が半減し、彼はまだまだ戦う気だ。

両目以外包帯で巻かれているからどんな表情をしているか青年の視点からでは確認出来ないが……分かる。

包帯の下では強い者と戦うことに喜び、嬉しそうに唇を曲がらせて笑っていることに。

それは青年も同じ事。

青年の強さに彼は喜びの声を上げる。

「最高だね！」

瞬時に両者は動き、拳を振るう。

関節部分が行き違い、2人の拳が頬に当たるが、大した痛みでは無い。だが構わずに殴打と蹴りの攻撃を続ける。

青年は上段回し蹴りで彼の首筋を、彼は片手で受け止めて一方向へずらして青年の胸元へ正拳。数ミリ後退りしながら倒れ込むが、彼の顎を狙い足で宙返り蹴り。

しかし、正拳で痛みが伴って着地に失敗する青年。顎を蹴られた衝撃で受身を取るのを忘れて砂地へ倒れ込む彼。

勝負は付いたように見えたが、まだ両者は殺る気だ。これほどまでに巡り会えた強者は居ない。2人の心が『まだ戦え』と叫びを上げている。

いや心では無い。血だ……2人に流れる一族の血が絶命するまで戦えと叫んでいる。

両者は立ち上がり、再び戦いの場へ戻ろうとした時、空に向けて1つ銃声が2人の耳に届いた。

銃声の正体に気づいた彼は舌打ち。折角の殺り合いが強引に止められてしまった。青年も敵の襲撃かと思い警戒するが……。

「止める神威」

戦闘を止めた者が現れたが、その者も傘を差している。傘を差している手には器用に青年の閉じた傘を持ち、片手には空に向けて閉じた彼の傘を持っていた。

投げて傘を渡し、『神威』と呼ばれた者は取っ手を掴み、再度傘を差す。もう1本の傘を託び言で手渡した。

「済まないねえ、すつとこどっこい（神威）が喧嘩を売っちゃて……」

「ヒドいな〜阿伏兔。ケンカじゃなくて純粹に楽しんでいただけだよ」

「どっちも同じだろ」

漫才のように会話する神威と阿伏兔に蔑みの視線を送る青年。

端切れの良いところで神威と会話を終わらせ、ボサボサの肩まで伸びた長髪、ちよつと髭を生やし、歴戦の戦士を感じさせる男性の阿伏兔が青年に問う。

「天人だらけの死体をお前が殺ったのか？」

否定せずに青年は肯定の言葉で言う。

「嗚呼……俺だ」

「はぁ……先を越されたな」

溜め息を吐く阿伏兔。何かマズイことでもしたかと考える青年だが、心当たりが無い。

「何かしたか俺……」

気まずそうに言う青年に、阿伏兔は気さくに否定する。

「お前が殺った此処の天人は、俺達に反旗を翻そう企てた奴等だ。で、俺達は此処へ来てそいつらを片付けしようとしたんだが……」

「ギャクに仕事トラれちゃったてワケ。でも君のオカゲで少しはハ

ブけたね阿伏兔」

「少し？ 馬鹿かお前は……さっきの戦闘中に他の仲間が連絡で『全滅した』と言っている」

「へえ。つまりラクしたってこと？」

「……そうじゃなくて仕事を横取りされたんだよ！ だが、お前さんのお陰で少しは楽に帰れそうだ」

褒めているのか、怒っているのか分からない阿伏兔に傾げる青年。
阿伏兔の話は放って置いて、神威は青年との話に集中。

「ところで君、もしかして夜兔？」

「良く分かったな」

（いやいや、外見や傘を見れば分かるだろ）

神威の言葉に冷静に肯定する青年。心の中でツツコミを入れて、敢えて口に出さない阿伏兔。

「君は強い……」

青年の強さを評価にすると高ランク。互角に渡り合える相手を見つけ、喜びを隠せない神威は或る提案をする。

「俺達と一緒に来ない？ そうすれば君の力をゾンブんに活用出来ると思うよ？」

神威の實力は青年と同等。

阿伏兎に至っては述べる必要は無い。冷静に装い、物事を詳細に分析出来る知略と神威に引けを取らない字實力を持ち合わせているのを青年は見抜く。

この2人と一緒に居れば何か楽しい戦いが待っているかもしれない。顔の下半分に巻いた包帯の中で、薄笑いを浮かべて神威の誘いに乗る。

「一緒に来てやる」

「よかった、君ならゼツタイ言うとおもったよ」

笑顔で青年の問いに満足する。

予想通りだ、神威は瞼を丸くし、青年を快く歓迎。神威と似た奴が増えたことで、阿伏兎は肩が少し重苦しくなった気がした。

「名前はなんて言うの？」

「戦^{いくさ}」

「夜兎族にピッタリの名前だね。戦いの中でしか俺達（夜兎族）は生きるキボウをミイだせない」

戦と神威が拳と拳をぶつけての握手代わりで自己紹介を終えた。

挨拶が終わるのを待っていたかのように1隻の空飛ぶ戦艦が、彼らの真上に大きな影を残してやって来た。

「あ、言いワスれてたけど……」

戦艦を指差して、笑顔で答える神威。

「こう見えて『春雨』の団長なんだよね俺」

「春雨？ 宇宙海賊で有名なあの春雨？」

神威の代わりに阿伏兔が言う。

「春雨の第七師団、『春雨の雷槍』と呼ばれている神威とは、こいつの事だ」

「噂で聴いたが、まさか実物を拝めるとは……」

星から星へ渡り歩き、戦いが起こる場所へと放浪していた夜兎族の青年：戦。彼は『春雨の雷槍』と言われる神威と出会うのであった。ずっとこどっこいがもう1人増えちゃったなく、と阿伏兔は戦艦の降下音に紛れて溜め息を吐いた。

春雨第七師団が所有する戦艦を神威と阿伏兔が戦に紹介している。天人の戦艦は放浪中に色々と乗せて貰ったから、内部構造はほとんど知っている。

では何故、知っている事を今更ながら紹介して教えて貰っているのか、それは神威が口笛を吹きながら嬉しそうにしているからだった。因みに顔に巻いている包帯は外している状態。

自分と似た性癖を持つ夜兎族に会えたことで、凄く上機嫌なのだ。

内部構造は知ってるよ、等と口が裂けても言えない。言ったら笑顔で阿伏兔を巻き込んで半殺しか、戦艦沈没で宇宙に放り出されて窒息死、などに成り兼ねない。こんな嬉しそうな神威は、阿伏兔も見ることが無い。それも上機嫌で口笛を吹く神威を見られるなんて貴重な光景だ。

阿伏兔は神威の話を聞くと驚きの半々、戦に至っては神威に合わせて話を進めている。

戦と阿伏兔の2人は肌で感知していた。戦場以外での場所で無駄に寿命を減らしたくは無い。

「うーん、もう良いかな？」

一通り紹介を終え、両手を上げて背中を伸ばす。神威の戦艦紹介がやっと終わったと、戦と阿伏兔は心の中で安堵する。

「じゃあ阿伏兔、俺はもうネるから戦に空きベヤでもショウカイしてよ」

片手で口を扇いで欠伸しながら神威は戦艦内の何処かへ歩いて去った。

残業を押し付けられ、溜め息が出る阿伏兔。此所最近、溜め息ばかり出るのが癖に成りつつ在る。自覚はしているつもりだが、神威の行動には手を焼いているから、自然と出てしまう。

「神威は普段あんな感じか？」

戦った時の冷徹な神威と、今の嬉しそうな神威のギャップに驚いていた。

「団長は嬉しいんだよ。自分と同じような相手に会えて絶好調さ」

閉じた傘の柄を片手で、肩に担いで「付いて来い」と言って手招き。戦は似た者同士と会えて喜んでるんだと理解し、阿伏兔に付いて行く。

「此処空き部屋だから、好きに使って良いぞ」

傘の先端部で指した方向に自動開閉式の扉。どうやらあの扉の向こうが、戦の寝床らしい。

「そんじゃあ、まだ仕事あるから俺は此所で」

手振りして去る阿伏兔を戦が呼んで引き止める。

「1つ訊いて良いか？」

阿伏兔が面倒くさそうな表情で振り返る。

「何だ？」

「神威は…血に命じて戦うのか、血に抗って闘うのか？」

「どうしてそんな事を？」

「これから共に戦う戦友、一応聞いておこうと思って」

深く問い質すことはなく、阿伏兔は率直に答える。

「前者さ。因みにおじさんの場合は愛でる方だ」

「なるほど」

「逆に訊くが、お前さんは？」

「俺も――」

今度は阿伏兔が訊いてきた。問いには戸惑うことなく戦は、

「俺も神威と同じだ。血に命ずるがままに戦場を駆け巡る。これが俺の生きる道」

「団長が聞いたら喜ぶだろうね」

其所で戦は休みの言葉を交わして、阿伏兔は何時もの気の抜けたような態度で今度こそ去ったゆく。

（……面白くなりそうだ）

夜兔族の青年『戦』。

戦いに飢えた戦は、神威や阿伏兔と共に歯車は加速し、始まる。

似た者同士は突然出会う（後書き）

神威と阿伏兔がキャラ崩壊しないか心配ですが、執筆頑張ります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3418y/>

銀魂 一春雨第七師団戦記一

2011年11月8日06時07分発行